

信仰とは何か —「『回勅』 希望による救い」を手引きにして—

大多和 明彦
(平成21年9月30日受理)

Was ist der Glaube ? —Am Leitfaden von “ENZYKLIKA SPE SALVI”—

OHTAWA, Akihiko
(Received on September 30, 2009)

キーワード：希望, 信仰
Key words：Hoffnung, Glaube

1節 序=篤く三宝を敬え

この六月、いつものように年に一度、アルムブルスター師がチェコからお戻りになられた。上智大学での定年を待つかのようにすぐさま、プラハ大学の神学部長を命じられ、はや十一年。お元気で穏やかな八十一歳だ。

私が師に見えたのは、かれこれ四十年も前のこと。その頃私は、まことに良寛の言うように「当時我之を見て見不之に遇いて遇わ不」という次第だった。即ち「真珠を豚に投げてやるな。おそらく彼らはそれらを足で踏みつけ、向き直ってあなた方に噛みついてくるだろう。」(マタイ7,6)という言葉通り、私は黒いヘルメットをかぶり、師に噛みついていたのである。まったく「自分が何をしているのか、自分で分からずにいる。」(ルカ23,34)状態だったのである。

あれから四十年。今は痛いほどによく分かる。「篤く三宝を敬え。三宝とは仏法僧これなり。」という聖徳太子の言葉が。まことに僧(応身)は、敬うべきであるということが。なぜなら僧の教えなくして我々は、仏(報身)のことも法(法身)のこともまったく識ることができないからである。僧ありて初めて我々は仏のなんたるかを識り、法のなんたるかを識り得るのだからである。

あるいはこれをこういってもよい。まことに神父は敬うべきである。というのも神父の教えなくして我々は、神の子イエスのことも父なる神のこともまったく識ることができないからである。神父ありて初めて我々は、神の子のなんたるかを識り、父なる神のなんたるかを識り得るのだからである。

かくしてアルムブルスター師がいなければ、私はイエスのことも、父なる神のこともまったく識り得なかったであ

ろう。況やローマ法王ベネディクト16世が『回勅』というものを著していることなど、知りようもなかったであろう。それは、2007年の末にローマからプラハに直接送られてきたものらしい。師は法王とは旧知の間柄で、師にとって法王はベネディクト16世というより、ラッツィンガーという方が親しみやすいらしい。「回勅」は師にとって、「ラッツィンガーからの手紙」なのかもしれない。

かくして師は、畏友山下善明に託してこの「回勅」を日本語に翻訳せしめた。そしてこの六月、我ら友人たちが師とともに行くいつもの温泉場で、幸いにも私は友の日本語訳と共に、ドイツ語原文(それは行末も不揃いな、A4版28枚のペーパーである。)を手に入れることができたのだ。

そこで私はこの夏の間中、『回勅』を導きの糸として「信仰とは何か」ということを、他力仏教の地盤から懸命に考えてみたのだ。本論はその思索の航跡である。

そこでまずは次節にこの航跡の大筋を前もって示し、大方の理解に資しておくこととしたい。

2節 思惟展開の大筋=希望から充溢の絶対無へ

人間には希望が贈り届けられている、と『回勅』は先ずその序文に言っている(第3節)。神を識る信仰とは、永遠の命への希望を抱くことであると(第4節)。なるほど希望とは、未来のこと、つまり、未だ来たらざるものことである。しかし信仰においては、未だ来たらざるもの(noch nicht=not yet)、即ち永遠の命が、もうすでに(immer schon = always already)我らの胸中に与えられるのだ、と『回勅』は語る(第5節)。我々が望みを抱く永遠の命は、しかし、目に見えるこの世界の内では決して現れ(erscheinen=appear)ない(第6節)。我々は如何にして、

この決して現れざるもの（それが永遠の命・父なる神である。仏教で言えば、それが空なる無上仏である。後述。）が確かに在すと確信し得るのか（第7節）。その手がかりはどこにあるのか。

決して現れざる父なる神は、しかし、十字架上に我らの罪を引き受けて苦しむ神の子・イエスという一つの似像を、我々に与えた（第8節）。

しかるに、イエスの贖罪を、イエスが神の子であることを、我々は如何にして確信することができるのか。ペテロは、我が身可愛さ（原罪）のゆえに、イエスを三度裏切った。鶏鳴の後、彼は己が身の浅ましさに慟哭する。原罪への慟哭が、彼にイエスの愛を確信せしめ、イエスが神の子であることを確信せしめるのである。そして神の子への確信を通して、彼は、決して現れざる父なる神が、我々に永遠の命を与えていること、彼には希望が贈り届けられていることを識るのである（第9節）。

ところで親鸞は、阿弥陀仏（報身）が決して現れざるもの（無上仏・空・法身）の似像である、と言っている。我々は、金と女と、地位、名誉に溺れざるを得ない己の宿業を、己の浅ましさを痛切に慚愧する。この宿業への慚愧の念（慟哭）が、我々に阿弥陀仏の広大な慈悲を確信せしめるのである（第10節）。

そして我々は、阿弥陀が無量寿であるがゆえに、無上仏も永遠であり、永遠の命であることを識る。そしてさらに、現れざる無上仏とは自然法爾に他ならないこと、即ち、森羅万象を自ずから然らしめていることを識るのである（第11節）。

我々はイエスを通して父なる神を、永遠を識り、阿弥陀仏を通して無上仏を、永遠の命を識る。この永遠の刻においては、現れざる父なる神のみが、現れざる無上仏のみが在す。父なる神・無上仏は現れざるがゆえに、無である。絶対無である。この絶対無が、森羅万象を自ずから然らしめているのである（第12節 結語）。

以上の大筋ができあがってきたそのプロセスを、では次に回勅原文とその私訳を挙げながら、詳しく述べてみたい。

3節 回勅序文=希望による救い

- auf Hoffnung hin sind wir gerettet, sagt Paulus den Romern und uns (Rom 8,24).Erlösung ist uns in der Weise gegeben, daß uns Hoffnung geschenkt wurde, eine verlässliche Hoffnung, von der her wir unsere Gegenwart bewältigen können: Gegenwart, auch mühsame Gegenwart, kann gelebt und angekommen werden, wenn sie auf ein Ziel zuführt und wenn wir dieses Ziels gewiß sein können; wenn dieß Ziel so gros ist, daß es die Anstrengung des Weges rechtfertigt. (1)

「我々は希望によってすくわれているのである（ロマ書8, 24.）」パウロはこのようにローマ人たちに、つまり我々に語っている。……我々には（筆者註：神から、仏から）すでに希望が贈り届けられ、回向せられてしまっているのだ。我々に救いが与えられているのは、そのようにしてなのだ。我々はこのたしかかな希望に身をゆだねて、我々のこの現代という時代を生き抜いていくことができる。この現代、たとえそれが辛苦に満ちていようと、それが一つの目的の地（筆者註：神の国、浄土）へと通じているならば、そして我々がこの目的の地を確信することができるならば、我々はこの時代を生き抜きこの時代に立ち向かうことができる。つまりこの目的の地がまことに偉大であって、その途上でいかなる辛苦もが正しきものと認められるのであれば、我々はこの時代を生き抜くことができるのである。（『回勅』1節）

上記の序文は、全章の主題を奏でる序曲のようなものだ、と何度も繰り返し回勅を読んだ私には思える。ここで法王ベネディクト16世（ラッツィンガー）は、以下に続く全章のすべてをすでに語り尽くしてしまっているのだ。つまり、我々にとって救いとは、神の国への、浄土への希望を持つことであると、希望を持つことによって我々は、この時代を生き抜いていくことが、challengeしていくことができるのだと。

合理性のみを信じる人には戯言と聞こえようが、ここで言う希望とは、目的の地、神の国、浄土への希望である。そこに永遠の命が与えられている。信仰とはそのような希望を持つこと、永遠の命を確信することなのである。

偉大な神学者でもある法王は、以下この希望という主題の周辺を奏でながら、指揮棒を振っていく。全世界のカトリック指導者たちよ、どうかよく聞くようにと。そしてどうかよく信徒たちを導くようにと。

ではこの曲の中で奏でられる希望とは、永遠の命とは何であるか。それへの確信は、いかにして見いだされ得るのか。

4節 Der Glaube ist Hoffnung 信仰とは希望である

Paulus erinnert die Epheser daran, wie sie vor ihrer Begegnung mit Christus "ohne Hoffnung und ohne Gott in der Welt "waren. (EPH 2, 12)Trotz der Götter waren sie "ohne Gott" und daher in einer dunklen Welt, vor einer dunklen Zukunft. "In nihil ab nihilo quam cito recidimus" (Wie schnell fallen wir vom Nichts ins Nichts zurück) heißt eine Grabschrift jener Zeit.Im gleichen Sinn sagt er zu den Thessalonicern : Ihr sollt nicht traurig sein "wie die anderen, die keine Hoffnung haben" (1

Thesse 4, 13)..... .Auch hier erscheint es als das Unterscheidende der Christen , daß sie Zukunft haben. Erst wenn Zukunft als positive Realität gewiß ist, wird auch die Gegenwart lebbar. Die Epheser waren vor der Begegnung mit Christus hoffnungslos, weil sie "ohne Gott in der Welt "waren. Gott kennenlernen - den wahren Gott, das bedeutet Hoffnung empfangen. (2)

パウロはエペソ人たちに、彼らがキリストと遭遇する以前には「この世にあって希望なく神なき」状態であったことを思い起こさせている。(エペソ人への手紙2, 12) ……彼らには神々はあったが、「神はなかった」。それゆえ彼らは暗き世に棲み、暗き未来の前に立ちすくんでいた。「我ら、なんとたちまちのうちに、虚無より堕ち虚無に還ることであろうか。」と当時の墓碑には書かれている。……同様の意味でパウロはテサロニケ人たちに語っている。汝ら、「希望なき者たちの如く」嘆くことなかれと。(テサロニケ人への第一の手紙4, 13) ……この箇所でも、未来(筆者註：希望のこと)を持つということが、キリスト教徒の特徴として述べられている。……未来(希望)が好ましく現実として確かにあるとき初めて、現在もまた真に活発たるものとなるのである。……エペソ人たちはキリストと遭遇する以前には、希望を持たぬ人たちであった。なぜなら彼らは「この世にあって神なき」ものたちであったから。神を、真なる神を識ること、それこそが希望を抱くことなのである。(『回勅』2節)

5節 希望の根底=神・仏との出会い=信仰

希望を持つということ、それは好ましい老後を願うなどということでは、もちろんない。そもそもそんな願いは、結局、不安に終わるほかはない。そこには決して確信の生まれようもない。

希望を持つということは、未来が、つまり未だ来たらざるもの(noch nicht=not yet)が、すなわち神の国が、浄土が、永遠の命が、好ましきものとして常にすでに(immer schon=always already=all ways all ready)在ると確信することである。

この「未だなきものがもうすでにあるのだ」(noch nicht = immer schon) (not yet = always already)ということが確信できないとき、我々は「なんとたちまちのうちに、虚無より虚無に還る。」しかない。Nichts=Nothingの暗渠の前に立ちつくしながら、一時の現下の享楽に身を沈めるか、多忙の中に己が心を忘れ果てるか、ぼんやり退屈なテレビでも見ているしかない。

ところで良寛は、地震に遭って落ち込んでいる越後の村人たちに、次のような励ましの手紙を送った。「病むとき

は病むが宜しく候。死ぬる時節には死ぬが宜しく候。災難に遭うときは災難に遭うが宜しく候。これ災難を逃るる術にて候。」

これがどうして励ましの手紙になるのか、科学技術しか信じられない者には、何のことやらまったく理解のしようもないだろう。しかし、この手紙を受け取った江戸時代の村人たちは「あー、ありがてえ。さすが和尚様だ。」と感激したに違いない。そして「さあ、皆の衆、めそめそしていても仕様がねえ。片付けものでもするべえか。」と、生き生きと立ち上がったに違いない。

良寛は曹洞宗の僧であったが、「草の庵に寝ても覚めてもおもふこと、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と言っている。彼は阿弥陀仏と出会っており、未だ来たらざる浄土がすでに在ると確信しているのだ。そして、このことを村人たちに教えていたに違いない。彼の手紙は、いかなるときでも希望を持つことを、「死ぬる時節には死ぬが宜しく候」と腹が据わっていることを、常に「在るがまま」に在ることを村人たちに思い起こさせたに違いない。まことに「信仰(信心)とは希望である(前出『回勅』2節)。」

しかし未だ来たらざるもの、神の国、浄土、永遠の命、それらが常にすでにあるとは、いかなることか。それはどのような具合なのであろうか。

6節 希望=信仰における未だ来たらざるものの現存

Der Glaube ist die "Substanz" der Dinge, die man erhofft; Beweis für nicht Sichtbares. Thomas von Aquin erklärt:Der Glaube ist ein "habitus", das heißt eine dauernde Verfaßtheit des Geistes, durch die das ewige Leben in uns beginnt und der den Verstand dahin bringt, solchem beizustimmen, was er nicht sieht.also der "Substanz" nach, das schon da ist, worauf wir hoffen: das ganze, das wirkliche Leben. Und eben darum, weil die Sache selbst schon da ist, schafft diese Gegenwart des Kommenden auch Gewißheit: Dies Kommende ist noch nicht in der äußeren Welt zu sehen (es "erscheint" nicht), aber dadurch, daß wir es in uns als beginnende und dynamische Wirklichkeit tragen, entsteht schon jetzt Einsicht.....

Der Glaube ist nicht nur ein persönliches Ausgreifen nach Kommendem, noch ganz und gar Ausständigem; er gibt uns etwas. Er gibt uns schon jetzt etwas von der erwarteten Wirklichkeit, und diese gegenwärtige Wirklichkeit ist es, die uns ein "Beweis" für das noch nicht zu Sehende wird. Er zieht Zukunft in Gegenwart herein, so daß sie nicht mehr das reine Noch-nicht ist. Daß es diese Zukunft gibt, ändert die Gegenwart; Die Gegenwart wird vom Zukünftigen berührt, und so überschreitet sich Kom-

mendes in Jetziges und Jetziges in Kommendes hinein. (7)

信仰とは、我々が期待する当のもの（永遠の命のこと、以下括弧内は筆者註）の基底となるものであり、見えざるもの（神の国、浄土）が確かに在るといふことの証しである。トマス・アクイナスは、このことを次のように説明している。……信仰とは一つの「ハピトゥス」である、即ち、精神の或る持続的な状態である。この状態を通して我々の内に永遠の命が生まれる。この状態を通して知性は、知性には見えざるものに同意するに到る。……つまり基底となるもの（信仰）の然らしむるところによって、我々が希望を抱くその当のもの、即ち完全な真実の命が、すでにそこに在るのである。まさに事ほどすでに左様であるがゆえに、来たるべきものこの現存は、確信もまた生み出す。この来たるべきものは、目に見える世界の内では未だなお見ることにはできない。つまり、それは“現れ”ない。しかしながら、我々はそれを、我々の内で始まりつつある躍動的な現実として胸に頂戴するのである。そのことによって、すでに現下に見えざるものへの洞察（神とは何であるかに関する洞察、後述）が我々には生じているのである。……

信仰とは、来たるべきものへと、未だ来たらざるものへと一人の人間が歩み寄っていくというようなことでは断じてない。信仰とはむしろ、それによって何か我々に与えられてしまふようなことなのである。つまり、希求せられている現実（完全な真実の命）の何か、信仰によってすでに我々に与えられてしまうのである。そして今現在のこの現実こそが、我々にとっては、未だ見られざるもの（父なる神の国）の存在を証明する証しとなるのである。信仰は未来（神の国）を現在へと引き入れるのである。その結果、未来はもはや単なる未だなきものではなくなる。このように未来が与えられてあるということが、現在を変貌せしめる。現在は未来的なるものに結びつけられる。かくして来たるべきものは己を超え出て現下へと歩み入り、現下は来たるべきものへと歩み入る。（『回勅』7節）

我々に救いが、「死ぬる時節には死ぬるが宜しく候」といふ動ぜざる安心が与えられるのは、我々に希望が与えられ、回施されているからである。希望がすでに神・仏の方から回向せられしまつていと確信しつつ、それを確かに胸に頂戴すること、希望によって安心すること、それが信仰である。

信仰によって未来（希望）は現在に入り来る。現在は未来（神の国）へと歩み入る。かくして現在が変貌する。この世にあって神なき希望なき虚無の現在から、目的の地（浄土）へと確かにつながる活発発たる現在へ。（越後の村人たちが生き生きと立ち上った様を想起せよ。）信仰とはこの変貌の経験である。この未だ来たらざるものがすでに

あるという経験が、未だ見られざる神が確かに在るといふことの証しである。

しかしそれにしても、見えざる、現われざる神はいかにして識られるにいたるのか。

我々は現われざるものへの手がかりをどこに求め得るのか。つまり信仰は如何にして可能になるのか。

7節 現れざるもの（父なる神）への手がかり＝我々を 駆り立てるもの＝永遠の命

Einerseits wollen wir nicht sterben.Aber andererseits möchten wir doch auch endlos so weiterexistieren.Was wollen wir also eigentlich? Diese Partadoxie unserer eigenen Haltung löst eine tiefere Frage aus: Was ist das eigentlich "Leben"? und was bedeutet das eigentlich "Ewigkeit"?Augustin sagt: Genau besehen wissen wir gar nicht, wonach wir uns eigentlich sehen, was wir eigentlich möchten. "Wir wissen nicht, was wir bitten sollen", wiederholt er ein Wort des heiligen Paulus (Rom 8. 26).Nichtwissen wissen wir doch, daß es sein muß. "Es gibt da, um es so auszudrücken, eine gewisse wissende Unwissenheit".....schreibt er. Wir wissen nicht, was wir wirklich möchten; Wir kennen dieses "eigentliche Leben" nicht; und dennoch wissen wir, daß es etwas geben muß, das wir nicht kennen und auf das hin es uns drängt. (11)

一方で我々は死にたくはない。……しかし他方でまた我々は無限に生き続けたいとも思わない。……我々はそもそも何を望んでいるのか。こういった我々の矛盾した有様が、より深い問いを引き起こす。即ち、そもそも「命」とは何であるか。「永遠」とはそもそも何を意味しているのか。……アウグスティヌスは言っている。よくよく案ずれば、我々はそもそも何を求めているのか、何を望んでいるのか、まったく分かっていないのだ、と。「我ら何を求むべきか知らず」（ローマ人への手紙8、26）という聖パウロの言葉を、アウグスティヌスは繰り返している。……しかしながら我々は、識らざるがままに、それがなければならぬということに識っているのである。「言ってみれば、確かに識っている『無知』というものがあるのだ。」……アウグスティヌスはこのように書き記している。我々は、本当のところ我々が何を求めているのか、分からない。我々にはこの「本当の命」が分からない。にもかかわらず、我々は識っている。我々の知らざるものが、我々を駆り立てるものものがなければならぬということ。 （『回勅』11節）

「我々を駆り立てるもの」、それは「本当の命」である。つ

まり das Leben selbst, das eigentliche, das dann auch nicht vom Tod berührt wird (12)「死によっても侵されざる本当の命そのもの(『回勅』12節)」である。それは我々を駆り立て、我々に切迫し、我々はそこへと突き動かされる。しかし我々には、それが何であるか分からない。にもかかわらず、この本当の命、永遠の命がなければならぬということ、我々は識っている。それがなければ希望なく、「虚無より、虚無に還る」(前出)しかないからである。浮薄な絶望のまま、暗黒の深淵へと続く死を待つしかないからである。

しかし我々は「死によっても侵されざる本当の命そのもの」に駆り立てられ、突き動かされるとしても、それはいまだ「確かに識っている『無知』」にとどまっている。我々には、この「無知」から脱し、それを確信するにいたる術はあるのか。確信は如何にして可能になるのか。

8節 現われざるもの(父なる神・無上仏)への手がかり=イエス・阿弥陀仏

未だ見られざる、未だ識られずにいるもの、それはいかにして識られるに到るのか。このことを我々は問わなければならぬ。

我々は、我らへの愛ゆえに我らの罪を引き受けて十字架上に苦しむ受難のイエスを見ることはできる。イエスは現われる。しかしイエスは、神の右に座す神の子である。宇宙の創造主である父なる神そのものではない。父なる神は決して現われない。しかし……。

Gott hat sich selbst ein "Bild" gegeben : im menschengewordenen Christus.Nun zeigt Gott gerade in der Gestalt des Leidenden, der Gottverlassenheit des Menschen mitträgt, sein eigenes Gesicht.(43)

神自らが己自身に一つの『像』を与えたのである。人となり給いしキリストという像を。今や神は、神に見捨てられた人間の有様を引き受けて苦しむ者という姿で、ご自身固有の一面を示すのである(『回勅』43節)。

現われざる父なる神への手がかりが、ここに与えられる。つまり神の子イエスは、父なる神の似像、比喩として、父なる神へのなんらかの洞察を与えるのである。しかしそれにしても……。

Die Wahrheit der negative Theologie ist vom 4. Lateran-Konzil herausgestellt worden. (43)
「否定神学の真理は第4回ラテラノ公会議によって明らかにされた。(同上)」

その否定神学によれば、父なる永遠の神は、感覚や思惟によっては決して知られず、すべてのカテゴリーを超えている。実際モーゼは、神に見えとしてシナイ山に登ったとき、一切の知的印象や感覚的印象が消え、神の暗黒に包まれた。それはどのようなにも表現できない「無」であった。そのような「父を識るものは、子……のほかにはだれもありません(マタイ11, 27).」

親鸞も無上仏(法身)とはかたちなきものであると語りながら、その現れざる無上仏への手がかりを示している。「無上仏とまふ(申)すは、かたちなくまします。かたちもましまさぬゆへに自然(自ずから然らしめる)とはまふすなり。かたちましますとしめすときには、無上涅槃とはまふさず。かたちもましまさぬやう(様)をしらせんとて、はじめて弥陀仏とまふすとぞききならひてさふるふ。弥陀仏は自然のやうをしらせんれう(料)なり(自然法爾章)。」

無上仏(仏法僧の法=法性法身=父なる神)は、「いろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こころもおよばれず、ことばもたえたり。」(『唯信鈔文意』)だからそれは空とか無とか言うしかない。しかしただそう言うだけでは、我々には一向にそれは識られ得ない。とりつく島がない。

そのとりつく島、それを何らか識らせんとする似像が、「神に見捨てられた人間の有様を引き受けて苦しむ」イエスである。そのイエスが十字架の上で示した我々への愛が、現われざる父なる神を我々に知らせる比喩である。親鸞で言えば、「大悲無倦常照我」という阿弥陀仏の慈悲の光が、我々にとっては空なる法性法身を識らせん「れう」(料、材料)なのである。

現象せざるかたちなきものを識る手がかり(似像)は示された。それは、イエスであり、阿弥陀仏である。では受難のイエスに、阿弥陀仏の慈悲に、我々は如何にして出会うか。信仰は如何にして可能になるか。

9節 父なる神の似像・イエスキリストへの確信=慟哭

ところで我々は、命令違反のゆえに神に見捨てられ、エデンの園を追われて以来、その「原罪」ゆえに貪欲、怒り、傲慢の心に捕らえられてきた。この浅ましき心に平安なく、安心なく、それは常に驕りと争いを産みだし、苦しみを生み出してきた。我々は「この世にありて神なく希望なく」、呆然と虚無の前に佇むしかなかった。それが「原罪」を背負う罪人の浅ましき姿だったのである。

パウロは己の浅ましき姿を次のように言っている。「我は肉なるものにて罪の下に売られたり。……我が欲するところはこれをなさず、我が憎むところはこれをなすなり。」

我が欲するところの善はこれをなさず、かえって欲せぬところの悪はこれをなすなり。」(ロマ書7) (このような己の浅ましさをの自覚を、仏教では「機の深信」という。後述。)

しかしながら我々はさしあたってたいい、己の浅ましき姿には気づかないのである。つまり「自分が何をしているのか、自分で分からずにいる(前出 ルカ23, 34)」のである。

パウロが己の浅ましさに気づいたのは、彼が良心的だったからではない。彼はこれに気づく以前にすでに十分に良心的であった。サウロと呼ばれていた彼は、その良心のゆえに、言い換えれば原罪から結果する厳格な硬き心のゆえに、ごりごりのパリサイ派であった。あまりにも良心的で厳格なサウロは、神との契約である律法を軽視し神殿を軽視して、ひたすら父なる神の愛のみを説くキリスト教徒を許すことはできなかった。彼はその良心に従って、キリスト教徒を徹底的に弾圧した。

パウロが「我は肉なるものにて罪の下に売られたり」と気づいたのは、キリスト教徒を弾圧すべくエルサレムからダマスカスへ赴く途中、「サウロよ、サウロ、なぜ私を迫害するのか」という天からのイエスの声を聞いたからである(『使徒行伝』9, 3-5)。つまり彼の気づきは、彼の良心が生み出したのではなく、イエスから回向せられたのである。このとき彼はこれまでの己の傲慢さに、つまりは原罪に慄然とし、慚愧の念が彼の胸を貫いた。頑なな律法主義は己をきつく縛り付けるだけで、己が身をおだやかに緩め許してくれるものではなかったのだ。つまり赦しを与えるものではなかったのだ。赦しを得るには、罰を受けなければならない。イエスがその残酷な罰を引き受けてくれたのだ。それがイエスの愛の示し方だったのだ。これが分かったときパウロは、イエスが神の子であることを、神の似像であることを確信した。

ペトロの場合も事情は同じである。有名な鶏鳴の後の彼の慟哭は、彼が良心的だったから生じたのではない。彼の慟哭は、「鶏が鳴く前に三度私を知らないと言うであろう(マタイ26, 75)」というイエスの予告によって、彼に前もって回向せられていたのである。

逮捕の恐れ、死への恐れ、肉なる我が身の可愛さ、それが原罪を負う者の姿である。その我が身可愛さ故に、あれほどに純粹で無垢で、あれほどに愛にあふれたあの人を裏切ってしまった。この痛切な慚愧の念は、一人ペトロのものではなかったであろう。それはナザレからイエスに付き従ってきた弟子たちに共通のものであったであろう。

この慚愧の念とともに彼らは、イエスがそのような自分たちの浅ましくも身勝手な罪人の有様を自分たちに代わって引き受け、自分たちの罪を背負ってくれたのだと信じた。純心で無垢な人の凄惨な十字架刑は、そう理解するよりほ

かなかった。処刑を恐れていた彼らに取って贖罪とは、観念ではなく現実だったのである。イエスの愛がやっと彼らに分かった。このとき彼らは受難のイエスと真に遭遇した。そうしてイエスがまことに神の子であることを確信した。

Jesus, der von sich gesagt hat, er sei gekommen, damit wir das Leben haben und es in Fülle, im Überfluß, haben (vgl. Joh 10,10), hat uns auch gedeutet, was dies heißt - "Leben": "Das ist das ewige Leben: dich erkennen, den einzigen wahren Gott und den du gesandt hast, Jesus Christus" (Joh 17,3) (27)

イエスは自分自身についてこう語っていたのだ。汝らが命を得るために、しかも充溢した溢れんばかりの命を得るために、私は来たのだ、と。さらにイエスは、この「命」とは何であるかも、我々に指し示していたのだ。神を、唯一の真なる神を識ること、そして神が送り給うたイエスキリストを識ること、それが永遠に生きることである(ヨハネ17, 3)。と。(『回勅』27節)

イエスの受難に遭遇して弟子たちは、イエスがかつて語っていた言葉を、今はっきりと理解したのである。その通り、あのお方はまことに、神の送り給うた神の子であった、と。父なる神は、我々に永遠の命を与えるために、あのお方をお遣わせなされたのだ、と。

そのとき彼らの現在は変貌する。父なる神の似像である一人子イエスを通して彼らには、現象せざる神へのなんらかの洞察が生じるからだ。即ち「唯一の真なる神」とは「永遠の命」であるという洞察が。現在は暗黒の未来につながるのではなく、「永遠」へとつながっているのだという洞察が。自分たちには、「永遠の命」が信仰において与えられているのだという確信が生じるのである。まことに「信仰とは、それによって何かが我々に与えられるようなことなのである(前出『回勅』7節)。」

10節 無上仏の似像(阿弥陀仏)への確信=二種深信

ところで仏教の言う「業」は、キリスト教の言う「原罪」に等しい。それは「宿業」とも言われる。宿業とは、生命の全進化過程における行いの記憶である。この過程の中で、おおよそ3万年前にクロマニヨン人が出現した。そのとき我々の脳容量は、約1600ccとなった。最古の生命の出現から見れば約30億年の命の記憶、現生人類の出現から見れば3万年の愛欲の記憶、それが「宿業」である。いわば親の因果が子に祟る数万年もの連綿たるがんじがらめの因果の連鎖、それが「宿業」である。

その宿業について『歎異抄』は、次のように言っている。

「よき心のをこるも、宿業のもよほすゆへなり。悪事のおもはせらるるも、悪業のはからふゆえなり。……兎毛羊毛のさきにいるちりばかりもつくるつみの、宿業にあらずといふことなし（13章）。」さらに19章では、「自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫（何億万年）よりこのかたつねにしづみつねに流転して、出離の縁あることなし。」と言う。また『愚禿悲嘆述懐』においては、「悪性さらにやめがたし、こころは蛇蠍の如くなり」と述べ、さらに『教行信証』『信巻』では、「悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の廣海に沈没し、名利（名誉と利）の大山に迷惑して（迷い惑って）定聚（浄土に往生することが正しく定まった人、正定聚、聚＝仲間）の数に入ることを喜ばず、真証の証（真実の悟り）に近づくことを快しまざることを。恥づべし、傷むべし」と語っている。

しかし愛欲や名利にとらわれていても、我々にはさしあたり「恥づべし、傷むべし」という思いは生じない。況や、自分が蛇蠍の如しとは、とうてい思わない。金と女と地位、名誉に夢中になるのも、人間なら当然だ、だからこそ人間は努力するのだ、と思ってしまう。つまり欲まみれの浅ましき姿に、我々はさしあたり気づかないのである。

しかし僧（親鸞にとっては法然）の教えを通して、修行する法蔵菩薩の無垢な清々しい姿を識り、この修行によって仏となられた阿弥陀仏の大なる慈悲の働きを識るとき、我々は、己の浅ましさを識る。己の宿業を「あら、浅ましや」と、「恥づべし、傷むべし」と慚愧する。親鸞はこの慚愧の念を「とても地獄は一定すみかぞかし（『歎異抄』2章）。」と述懐している。今やこの慚愧の念が、善知識（僧）の教えをきっかけにして、阿弥陀仏から贈られる、回向せられるのである。

この慚愧の念（機の深信）へと痛切に堕ちながら、阿弥陀仏は称名一つで我々を「無上仏にならしめんとちかひたまへる（自然法爾章）」のだと教えられるとき、「あら、有り難や」の思いが胸にあふれる。このとき我々は、阿弥陀仏に遭遇する。この思いを親鸞は「そくばくの（数えがたきほどの）業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたる本願のかたじけなさよ（『歎異抄』19章）。」と述懐している。己の後ろ暗き浅ましさを慚愧する「機の深信」が深く深く堕ちれば堕ちるほど、その浅ましき我が身を「となへやすき名号を案じいだしたまひて、この名字をとへんものをむかえとらんと御約束（『歎異抄』11章）」してくださる阿弥陀仏への報恩感謝の念が高々と昇り来る。「落つる釣瓶に、上る釣瓶」のように、「機の深信」は善知識（僧）の教えを媒介して「法の深信」（阿弥陀仏への感謝）と結びつく。このとき我々は「大悲無倦常照我」を「あら、有り難や。もったいなや。」と確信する。とてつもない時間をかけて、名号一つで救い取るぞと案じいだし給うた「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに

親鸞がためなりけり（『歎異抄』19章）。」と確信する。

「機の深信」と「法の深信」という「二種深信」が、つまりは「信心」自体が、我と我が心から生じ来たるのではなく、阿弥陀仏から回向せられるのである。このことが「如来よりたまはりたる信心（『歎異抄』6章）」ということである。『教行信証』『信巻』は、信心が如来から廻施せられたものであることを、次のように言っている。「如来苦惱の群生海を悲憐して、無礙廣大の浄信をもて、諸有海に廻施したまへり。これを『利他真実の信心』となづく。」

11節 現象せざるもの（神・無上仏）への洞察＝自然法爾

この「利他真実の信心」を胸に賜るとき、我々は未だ来たらざる浄土に、今、結びつけられる。即ち「現在（慚愧）は未来的なるもの（浄土）に結びつけられる。かくして来たるべきもの（浄土）は己を超えて現下（慚愧）へと歩み入り、現下は来たるべきものへと歩み入る（前出『回勅』7節）。」このとき我々は、貪愛瞋憎（貪り、執着、怒り、憎しみ）の宿業の身のまま、その如如のまま、そのあるがままの姿で、無上仏にならしめんと誓い給へる阿弥陀仏の尽十方の無礙光を身に受けるのである。

そうして我々は、この阿弥陀仏のなんたるかを教えられて、かたちなくまします無上仏への何らかの洞察を得るのである。阿弥陀仏とは尽十方無礙光如来であるがゆえに、無上仏も無礙光であると。遮るものなき光であると。阿弥陀とは無量寿であるがゆえに、無上仏も量（空間）において無限、寿（時間）において無限であると。つまり無上仏は永遠であると。永遠の命であると。

「自然法爾」とは、親鸞がこのような阿弥陀仏の理解からして、現象せざる無上仏への洞察を言ったものに他ならない。

「自然といふは、自はおのづからといふ、……然といふはしからしむといふことばなり。……法爾といふは、この如来の御ちかひなるがゆえに、しからしむるを法爾といふなり。……すべて、ひとのはじめてはからはざるなり。このゆえに義なきを義とすとしるべしとなり（自然法爾章）」。

「かたちなくおはします」がゆえに空とか無とかとしか言いやうのない無上仏とは、自ずから宇宙のすべてを然らしむる、如如たらしめるものである。空とは単なる空虚ではなく、万象を生み出す充溢である。無尽蔵なる無一物（無一物中無尽蔵）が、空なる無上仏である。親鸞は無上仏を、そのように洞察したのであった。

我々を見ることのできる神の子イエスへの確信を通して、

現れざる父なる神への洞察を得る。語り得る阿弥陀仏から「たまはりたる」信心を通して、語り得ない無上仏の洞察を得る。信仰、信心は、現れざる父なる神・無上仏への洞察へと我々を導くのである。この洞察において我々は、永遠ということを知る。永遠の命が有るということを知るのである。このとき希望が確かに与えられる。

では、その永遠とはいかなるものであるか。それは「無限に生き続ける」ことなのであるか。

12節 結語 永遠とは=充溢の絶対無

しかし「死によっても侵されない」ということ、即ち「無限に生き続ける」ということを、我々は望んでいないのではないか。その通り、望んではない。それは「永遠」を、ただただと続く平坦な終わりなき「時間」と考えてしまうからである。

Das Wort "ewiges Leben"..... Es ist notwendigerweise ein irritierendes, ein ungenugendes Wort. Denn bei "ewig" denken wir an Endlosigkeit, und die schreckt uns.(12)

「永遠の命」……それはなんとも我々をいらつかせる不十分な言葉である。というのも「永遠」というとき我々は終わりのなさを思い、それに我々はぞっとするからである（『回勅』12節）。

永遠とは単なる「終わりのなさ」ではない。ではそれはいかなるものであるか。

Ewigkeit ist nicht eine immer weitergehende Abfolge von Kalendertragen, sondern etwas wie der erfüllte Augenblick, in dem uns das Ganze umfängt und wir das Ganze umfassen. Es wäre der Augenblick des Eintauchens in der Ozean der unendlichen Liebe, in dem es keine Zeit, kein Vor- und Nachher mehr gibt. (12).

永遠とは暦を常にずっとめぐり続けていくようなことではない。そうではなくて、永遠とは充溢した瞬間のようなものである。この瞬間において全体が我々を優しく包み込み、我々が全体を抱きしめるのである。言うなればそれは、無限の愛の大海原に浸される瞬間のようなものである。このとき、時間はない。もはや、以前もなければ以後もない。（『回勅』12節）

本当の命、永遠の命は、日めくりカレンダーの中にはない。永遠とは、ただただと無限に生き続ける「終わりのな

さ」ではないからである。それは「以前もなければ以後もない」刻だからである。それは「不生不滅（『般若心経』）」の刻だからである。

ゾロアスター教では、この刻は「無限の刻」と言われる（拙著『ゾロアスター教の三位一体論』2003年東京家政大学紀要参照）。それは天地創造以前の、ビッグバン開始以前の、ただアフラ・マズダのみが一人存在する刻である。アフラ・マズダとは、この「無限の刻」なのである。神とは無限の刻、永遠の刻である。それは「充溢した無限の愛に浸される瞬間」のようなものである。

ペテロは、慟哭しつつイエスの受難に遭遇する。そのとき父なる神がその愛ゆえに、我々を原罪から救い給うことを識るのである。その刻が「無限の愛の大海原に浸される瞬間」である。

あるいは我々は、「如来よりたまはりたる信心」（前出『歎異抄』6章）を通して、阿弥陀仏が、こんなにも業深く仕様がな駄目な奴を、悲しみの眼差しで倦むことなく見つめてくれていることを識る。慚愧の念と共に我々は、「大悲無倦常照我」を「有り難や」と胸に戴くのである。この刻が「無限の愛の大海原に浸される瞬間」である。『教行信証』「信巻」では、この瞬間は「信楽開発の時尅の極促」と言われている。この「有り難や」において永遠の刻は、われわれになんらか感知されるのである。

そのように感知される永遠の刻、すなわち「充溢した」瞬間においては、神以外何も無い。何も無いがゆえに、それは空である。無である。絶対無である。しかしそれは空っぽの虚無ではない。かえってこの無は、「愛の大海原」のごとき充溢なのである。充溢の絶対無、それが現れざる神である。それが「無義をもて義とす」る無上仏、法性法身である。永遠なる充溢の絶対無が、森羅万象を自ずから然らしむる「自然法爾」である。「永遠の刻と存在」とは、そのような関係なのである。

永遠の命への希望は、つまり信仰は、かくして成立する。

しかしそれにしても、「善知識にあふことも、よく聞くことも難ければ、信ずることはなほ難し（親鸞）」である。まことに、よく、よく、聞かなければならない。

Abstract

Papst Benedictus XVI hat im Jahr 2007 "Enzyklika , die Erlösung von der Hoffnung", geschrieben. Am Leitfaden von dieser Enzyklika habe ich auf dem Untergrund von dem Hilfe-Buddhismus darüber gedacht, was der Glaube ist.

Die Enzyklika sagt, daß die Erlösung uns in der Weise gegeben ist, daß die Hoffnung geschenkt wurde. Der Glaube, der gewiss den Gott weiß, ist es, daß wir die Hoffnung auf das ewige Leben haben, weil der Gott das ewige Leben ist. Natürlich erscheint der Gott nicht in dieser Welt, aber er hat sich selbst ein "Bild" gegeben : im menschengewordenen Christus. Nach dem Glücken wehklagt Peter über seine Armseligkeit, dann weiß er die Liebe von Christus. Dann weiß er, daß Christus das Kind vom Gott ist. Das Wehklagen über unsere Armseligkeit führt uns zum Glauben.

Auch im Hilfe-Buddhismus werden wir durch unsere Betrübniß um Karma zum Amida-Buddha geführt. Amida-Buddha ist das Bild von Nehan-Buddha, der in dieser Welt nie erscheint. Aber durch die Erkenntnis von Amida-Buddha können wir die Einsicht haben, daß der Nehan-Buddha, das Nichts, alle Dinge in der Welt so läßt. Shinran, der berühmte japanische Priester, heißt diese Situation Zinen-Honi, Natur-Lassenheit.